言語学とクリティカル・シンキング

── 誤謬論を中心に

塩 谷 英 一 郎

0．はじめに

クリティカル・シンキングは、議論を理性的に行ううえで基本的な道具として認識されるようになってきた。教育上の普及は、まだ十分に行き渡っているとはいえないかもしれないが、心理学、社会科学、人文科学の多くにおいて、既に広く取り入れられている。ただし、クリティカル・シンキングは、言語や論理と切り離せられないものではあるが、言語学との関係に関しては、まだ十分に論じられていないようである。小論では、クリティカル・シンキングと言語学との関連性について、いくつかの考え方を提供する。

ただし、言語学もクリティカル・シンキングも、近年の発展は著しく、限られたスペースで盛り込める量には限りがあるので、言語学の中でも critical thinking と親和性の高いもの、また、逆に、言語学や言語教育を巡る議論の中でも critical thinking を要するものに焦点を当てる。

1．言語学の可能性

言語学は、簡明な定義としては、言語の持つ様々な側面（音韻、構造、意味、社会的役割など）を探究する学問として、人文科学の中でも重要な地位の一つを占める学問である。ただ、言語は、水・酸素・たんぱく質と同様に、あまりにも日常にあふれていて、普段取り立てて意識しないで営まれていることが多いほどに必要不可欠不可分の存在でありすぎて、時として地味な存在になってしまっていたりする。しかし、言語の多様性を考えれば、たんぱく質の多様性にも劣らないものがある。

言語は、哲学などの知的営みの対象として考えれば、東西古今の様々な哲学・思想などでいろいろに扱われてきた。近いところでいえば、語用論（pragmatics）などは、主に英米の分析系の哲学者、Austin, Searle, Grice などの哲学者の問題提起から言語学の一分野として飛躍的に発展したものもある。遡れば、Wittgenstein の影響もあるであろうし、意味論でも Frege や Russell の思想から発展させたものも少なからずある。

200 年前後の歴史を持つ近代アカデミズムのもとでも、初めは、個別言語の記述文法、比較言語学・歴史言語学、社会思想における言語の役割などからの蓄えはあったが、分析的な科学としての言語学の成立者の代表としてよく挙げられるのは、19 世紀後半から 20

世紀前半にかけてのソシュール（Saussure）による言語分析概念の体系的な提示であろう。以後、ここ 100 年の間に、言語学理論は様々に発展してきた。そのうち、今から 50 年くらい前頃からは、Chomsky の提唱する生成文法が一世を風靡したが、「理論言語学と言えば生成文法」と限定するのは早計で、近年は、認知言語学、機能主義言語学、語用論、社会言語学、心理言語学、言語習得論など、枚挙にいとまはない。

言語学の広がりについて、その多様性を概観する。

まず、扱う範囲から考えた場合、(1-1) 音韻論、(1-2) 形態論、(1-3) 文法論（その下位分野として[1-3-1] 品詞論、[1-3-2] 統語論、[1-3-3] 構文論）、(1-4) 語彙論、(1-5) 意味論、(1-6) 語用論、(1-7) 談話分析、(1-8) テキスト論、などがある。ただし、これらは排他的に存在しているのではなく、「音声」、「構造」、「意味」は絶えず相互作用をしていると考えるべきであろう。学派によって異なっている点があるとするならば、「言語を成り立たせる上で何がより根本にあるか」や、「これらがどのように相互作用し、どれくらい自律しているか」に関する見識の違いということも一つのポイントであると思われる。

学派的視点からすると、

(2-1) 形式主義（たとえば、生成文法における統語構造の抽象性と自律主義など）[1]

(2-2) 機能主義（たとえば、認知言語学における、文法や構文も認知図式や意味と対応させる考え方など。他にも「体系選択言語学」のような機能主義もある）[2]

言語学の概説書は、長年、(1-3-2) を、(2-1) の系統の句構造文法などによる説明を主としてきた。しかし、(2-2)の系統の立場からすれば、(1-3-2)も基本的には(1-3-3)の発展とみなし、認知図式との対応付けによって、統語規則が形成される、という考え方が可能となっており、そのような見解を含ませるかどうかで、言語学書の立ち位置が分かれている。いっぽう、(2-2) の立場からすると、意味図式・認知図式をてこにして、上に列記した様々なレベルの言語分析に適用できると考える[3]。

いっぽう、言語に関する諸学は、他分野の問題意識とともに、近年とみに幅広く発展している。

(3-1) 神経言語学：言語のプロセスを神経科学的に検討する。さらに広く、biolinguistics という考え方もある。

(3-2) 心理言語学：言語について心理学的な見地や方法から追究する。言語習得論もこの範疇に入れる考え方もある。

(3-3) 社会言語学：社会の中での言語の使われ方に関して追究する。

(3-4) 対照言語学：異なる言語の間の異同を比較検討する。言語類型論を含ませる考え方もある。

(3-5)　歴史言語学：言語を歴史的な変遷から追究する。比較言語学はこの範疇に入る。

(3-1) に関しては、たとえば、統語回路、認知処理回路、意味回路などが少しずつ解明されることが期待されている。ただし、仮に統語回路が立証されたとしても、それがチョムスキーのたどり着いたミニマリズムに合致したものになるのか、また、統語回路が証明されたとしても、言語習得上、意味排除の統語理論で「言語習得」が立証されるか、というと、それは別の問題であろう[4]。

(1-6) (1-7) (1-8) になると、社会的要因・文化的要因や心理的要因などが様々に絡んでくる。言語を中核にして様々な学際的研究が、欧米では実際に盛んに行われていて、近年の成果もうなぎ上りに増えている[5, 6]。とともに、言語行為の差の基盤としては、より客観的に見える(1-2) (1-3) (1-4) のレベルでの言語構造の違いについても意識をし、学的知の一つとして共有されてしかるべきであろう[7]。

いっぽうで、言語相対主義が歯止めが利かなくなると、「ことばが違うと所詮通じない」という内向きの、国際コミュニケーション時代に逆行する考え方にも向かってしまう。そこで、言語の相対性と合理性の両方に目配りをした言語学の基準、ならびに、より複雑な言語体（談話、テキストなど）で基準とされるものとして、クリティカル・シンキングの考え方を検討する。小論では、特に、「言語学は言語教育に役に立たない」という一部の無理解者の偏見を少なくすることを目標とし、１つは言語学で critical thinking に資する多くの事項からいくつかピックアップして指摘することと、上述の言語学に対する偏見などに対し critical thinking を援用して、誤った偏見を排することにある。

言語学は、成立期より、言葉の歴史的展開や、文法構造・語彙構造などを追究し、翻って、その恩恵は、語学教育に多いに反映され、基礎付けになっているものであることは否定できない。専門的成果をどこまで取り入れるか、は、学習者のキャパシティの問題でもあるが、たとえば、認知言語学の成果が英語教育にどれくらい採り入れられているかとなると、年々反映されるようになってきてはいるけれども[8]、まだ十分とは言えないくらいである。と同時に、近年の言語学の展開は、社会科学系の視点を採り入れたものが増えている。言語は、概念をできるだけ精確に記述する道具であるとともに、意志疎通をはかる道具でもある。情報伝達にとっての手頃な長さ、情報の構成の仕方、情報伝達にとって役に立つ広義の文法やディスコース構成、という視点とともに、主観的・主体的営みとしての情報伝達内容がいかに一方に偏ったものにならないか、一部の人たちに対して偏見をもったものにならないようにするか、不当な不快感を引き起こさせるものにならないようにするにはどうするか、という視点が、社会言語学や語用論の一部にも表れてきている。critical discourse analysis と呼ばれるような新ジャンルもその一つであろう。ここに、言語学とクリティカル・シンキングを橋渡しするジャンルがあるわけであるが、近年の発展的な議論と成果は次の機会とし、以下では、これまで、言語学と別個に扱われてきたクリ

ティカル・シンキングが、言語のどの側面と関わっているのか、検討する。

2．クリティカル・シンキングの諸相

クリティカル・シンキング（critical thinking）は、直訳すると「批判的思考」となるが、日本語の「批判」も、英語の critical も、誤解を受けやすい。いくつか代表的な定義として引き合いに出されるものを挙げると、たとえば、Ennis（1985）は「クリティカル・シンキングとは…何を信じ、何を実行するかを決断することに焦点を置いた、論理的、かつ思慮深い思考」（p.54）とやや広く定義している。もう少し長いところでは、1987 年の夏の第 8 回 Annual International Conference on Critical Thinking and Education Reform で、Michael Scriven & Richard Paul は、

> Critical thinking is the intellectually disciplined process of actively and skillfully conceptualizing, applying, analyzing, synthesizing, and/or evaluating information gathered from, or generated by, observation, experience, reflection, reasoning, or communication, as a guide to belief and action. In its exemplary form, it is based on universal intellectual values that transcend subject matter divisions: clarity, accuracy, precision, consistency, relevance, sound evidence, good reasons, depth, breadth, and fairness.

と定義している。短縮して述べるのは難しい作業ではあるが、「証拠、正確さ、論理、合理性、公平性でもって概念化・分析・総合判断をする」という部分は欠かせない部分と考えられる。理科学系であれば、厳密な実験検証と理論づけとしてすでに行われていることであるが、人文・社会系諸学においては、「公平性」→「偏見を排する」、「情報を基に分析・総合」→「先入観を見直す」といった部分が、自然科学に劣らず様々に検証に掛けられるべきところと考えられる。

近年のサイトでは、The Critical Thinking Community に、以下のような定義がある。

> Critical thinking is that mode of thinking — about any subject, content, or problem — in which the thinker improves the quality of his or her thinking by skillfully analyzing, assessing, and reconstructing it. Critical thinking is self-directed, self-disciplined, self-monitored, and self-corrective thinking. It presupposes assent to rigorous standards of excellence and mindful command of their use. It entails effective communication and problem-solving abilities, as well as a commitment to overcome our native egocentrism and sociocentrism.

意思の伝達、問題解決力の向上、自己鍛錬であるとともに、「自分の生まれ」中心主義や「自分が所属する社会」中心主義の克服を明示することが、明確化の上で必要であることが見て取れる。

クリティカル・シンキングは、日本でも、ここ 10 年程の間に様々な刊行物により、広く知られるようになってきた。たとえば、古典的で日本語訳もある Fisher (2001) においては、「クリティカル・シンキングとは何か」「理由と結論を見分ける」「推論を理解する—様々な推論のパターン、前提・文脈・評価マップ」「表現の明確化と解釈」「情報の信頼性」「推論の評価」といったテーマで、クリティカル・シンキングの概要を示している[9]。

その中で、まず取り組むべきこととしては、議論や推論が間違ったものなのかどうかを見分ける力である。どのような議論が、誤謬、ないし虚偽、ないし詭弁なのかを見抜くことである。

そこで、次に、具体的に代表的な誤謬の例を挙げて検討を進める。

3．クリティカル・シンキングと言語学に関する議論

クリティカル・シンキングの理念は理想的なものであるが、人の判断には有限の時間というものもあり、常に完全に実行できるものではないが、いくつかの基本的な点は押えておくべきであろう。その中でも、筆者が強調したい部分は、「誤謬の議論」をできるだけ回避する努力を常に持つべきだという点にある。

ここでいう誤謬は、英語の情報としては logical fallacies（論理的な誤り）という名称で呼ばれるもので、基本的な 3 段論法の間違いから、はぐらかし術、先入観注入・感情論まで、多岐にわたる。ただし、細かく分類すると 100 以上をリストアップする文献もあり、本論では、筆者が特に重要と思うものを厳選して示す。（なお、他に数学の誤用も数種類あるが、ここでは割愛する。）

logical fallacies は、英語ではすでにネット上でもたくさんの情報源がある。中でも、logicalfallacies.info や、fallacyfiles.org、Literacy Online Education をはじめとして、（単なる ABC 順でなく）様々に分類して提示しているところも少なからずある。また、刊行物でも、ほどよい分量にまとめたものもある[10]。小論では、これらを参考にしながらも、より精確な分類比較は別の機会に譲るとして、著者なりに大まかに分類したものを列挙する[11]。

(2-1)　タイプ 1：論理的な誤り

(2-1-1)　誤った二分法（false dichotomy, false dilemma, either/or fallacy）

「誤った二分法」とは、実際には他の選択肢があるのに、2 つの選択肢だけしか考慮・提示しない誤りである。両極端しか考えない場合、「白黒思考」(black-and-white thinking) と呼ぶこともある。

たとえば、有名なところでは、9/11 事件直後のブッシュ大統領の「我々の側につくか、敵につくかのどっちかだ」という発言は、両極以外の様々な考えの存在を無視している。テロは許せないが、アメリカの中東政策にも疑問を感じていて同調しない、という見識があることすら排除するような考え方である。

「A は正しい人だ。B は間違った人だ。」といったような二者択一も、過度な単純化であろう。人間各人にとって、様々な他人のパーソナリティほど、複雑で、人によって違って見えるものは珍しいし、人の態度振舞いも、「他者が何を認識しているか」に関する認識も、状況に応じて変動することは多々あり、単純な二者択一で論じるのがとりわけ危険なジャンルと考えられる。

「外国語学習で e-learning は無益だ」と「外国語学習で e-learning は有益だ」のどちらか片方を選択させるのも、一つの例である。実際には、学習カリキュラム全体の中でどのように位置づけ、どのように使わせるか指導するプランニングができ、多くの人が協力して初めて有益となるのであり、細かいことを無視して最初から単純に二者択一を迫るところに問題がある。

(2-1-2)　全称の誤用（false universal）

「全ての X は Y である」とか、「誰も Z しない」のような文の形を取り、例外を無視した一般化を元に論旨を展開することで、「例外の撲滅」とも呼ばれる。

ニュース番組などで評論家 A が「誰も B を支持しない」といった発言を時々耳にするが、実際には、B 支持を考えている人がいるからこそ、話題になることが普通で、たとえ B 支持が少数派だったとしても、全称的な否定は真実ではない場合が多く、むしろ A 氏が決めつけ型人間であることを示している可能性もある。ニュースに限らず、一般的に、C というテーマに関心を持たない人が、「誰も C に関心など持たない」と言うことが時にあるが、これも同じ誤謬に該当することが往々にしてある。C がスポットライトの当たらない学問や、syntax や semantics のように基礎的ながら地味でその価値が分かるのに人によっては時間がかかる科目の場合も当てはまる。

(2-1-3)　合成の誤謬（fallacy of composition）

「ある部分が X だから、全体も X」という議論を、合成の誤謬という。

たとえば、「組織 A の職員が逮捕された。だから組織 A 全体もまともなものではない」と言い切るのは、よほど統計的に有意なだけの人数が示されているのでない限り、合成の誤謬に該当する。

「生成文法は統語論を、できるだけ意味に頼らずに説明しようとする。だから、言語学は言葉の意味の繊細な部分を扱わない」といった例が考えられる。このように、言語学の近年の成果を少しも理解しようとしないで批判する人は、このような基本的な誤謬をして

いることがある。

(2-1-4)　分割の誤謬（fallacy of division）

「全体がＸだから、ある部分もＸ」という議論を、分割の誤謬という。

たとえば、「日本人は一般に勤勉だから、日本人Ａさんも勤勉なはずだ」とか、「言論の自由は保証されている。だから人の誹謗中傷も保証されている」とかいった議論は、分割の誤謬に当たる。

以下の３つは、３段論法の基本的な間違いである。

(2-1-5)　媒名辞不周延の誤謬（fallacy of the undistributed middle）

「ＸはＹである。ＺもＹである。したがってＺはＸである」という誤った三段論法のことを言う。このタイプの推論は、多くの場合成り立たない。（Z⊆X⊆Y の場合に限り成立する。）

この誤りは、話をしている人にとって身近なテーマであれば間違えないが、身近でないテーマだと間違える可能性もないわけではない。Ａという分野の中でもかなり考え方の違うＡ１とＡ２という分野・学派があったとする。Ａという領域に理解の疎い人が、「Ａ１はＡだ。Ａ２もＡだ。所詮Ａ２もＡ１ではないか」という乱暴な議論をする人がいないとは、残念ながら言いきれない。

(2-1-6)　後件肯定の誤謬（affirming the consequent）

「もしＸならば、Ｙである。」「Ｙである。したがってＸである。」という誤った三段論法のことを言う。

たとえば、「英雄は色を好む」「Ａ氏は色を好む。だからＡ氏は英雄である。」と論じれば、どこかおかしいとすぐに思うであろう。要点は、ＸはＹの部分集合でしかないのに、ＸがＹを包含するかのようにすり替えたところにある。

「言語生得説が成り立てば、言語習得が成立する」「言語習得は成立している。したがって言語生得論は正しい」という議論も不十分な議論である。

(2-1-7)　前件否定の誤謬（denying the antecedent）

「もしＸならば、Ｙである。」「Ｘではない。従って、Ｙではない。」という誤った三段論法のことをいう。

「イギリス通ならば英語通である」からといって、「イギリス通でない。したがって英語通ではない」とはならない。もちろん、「英語通」が意味する範囲が国際英語なのか、イギリスのイディオムなどの通を指すのかによって議論は少し違ってくるとはいえ、各国事情や文化歴史の知識は、その言語を基にしてこそ深い理解が得られるのに対し、各国事情

や文化歴史は言語の知識とは明らかに守備範囲が違っていると考えれば、この誤謬論に入ることになる。

(2-1-6) や (2-1-7) の誤謬は、「ならば」という日本語のあいまい性にもひとつの原因がある。論理学では、「X ならば Y 」は包摂関係で、Y のほうが広い。しかし、日常の用法のひとつには、X が原因で Y が結果、ということがあり、入り口の X の先に Y が小さく見えてしまう。

(2-1-8)　循環論法（circular reasoning）、論点先取（begging the question）

ある事柄の証明で、その事柄自体やその事柄を含意する真偽不明の前提を使ってしまう論理的誤りを論点先取といい、それが循環論法をひき起こす。

「A 氏の言っている事は詭弁です。だから間違っています。」

と B 氏が言った場合。どのような理由で詭弁と判断したのか説明しなければ、B は「A 氏の言っていることは詭弁です。なぜなら間違っているからです。なぜ間違っているかというと、詭弁だからです」と述べただけとなり、循環論証に該当する。初めに判断ありき、の論法になる。

(2-1-9)　未知論証（argument from ignorance, ラテン語で argumentum ad ignorantiam）

前提がこれまで偽と証明されていないことを根拠に真であると主張する。あるいは前提が真であるということが証明されていないので偽であると主張する誤謬。

たとえば、「無神論者は、宇宙の中で人間のような高等生物が誕生するのに絶対神の存在は必要ないと言っているが、それを証明するものはないから、絶対神は存在する」といった議論がある。

また、「認知言語学者は、言語表現のメタファー・メトニミー的意味拡張や構文の意味づけをはじめとする認知言語学の成果が語学力の向上に役に立っていると言っている。でも、自分が聞いた人でそのようなことを言った者はいない。したがって役に立たない」といった議論もここに含まれる。

新しい考え方は、検証されるまでに時間がかかるものである。いっぽうで、検証困難な伝統知も点在する。

(2-2)　タイプ 2：帰納法関係の誤謬

今までは、演繹上注意すべき誤謬の例だったが、以下は、帰納法上注意すべき事項である。演繹論理的な誤りが言語そのものから見やすいのに対し、帰納法的な誤りは、言語そのものだけからは見破りにくいが、議論を誤らせないためには見落とせない。

(2-2-1)　早まった一般化（hasty generalization, jumping to conclusion）

「A 男君は口下手だ」「B 男君は口下手だ」「C 男君は口下手だ」、と 10 人くらい上げていって、「男はみんな口下手だ」とかいうのは、早まった一般化の一例である。帰納法で重要なのは、世論調査の方法でも用いられる統計学的技法で、有意なだけのサンプルがあって初めていえることである。その場合でも、大体の割合しかつかめない。全称命題的に結論を出すのは、人文社会の分野においてはかなりの慎重を要する。

言語学の場合、少数言語まできちんと調べようとすれば、かなりの時間と労力を要し、普遍法則を見つけることはかなり困難である。かなり言語学に熟達している研究者でも、たとえば、「名詞」や「動詞」に相当するものを割り出せても、独立した「形容詞」を普遍的なものとして広範な少数言語でもれなく見出すことは大変である。

「英語は人間中心で、日本語は自然・状況中心」という対比は、比較的当たっているとはいえ、英語に多くて日本語には比較的少ない無生物主語を考えると、先の対比は安易には一般化しづらいところがある。むしろ、「英語は日本語よりも因果関係・影響関係への意識が強く、その結果として、英語のほうが他動詞表現が多い、行為者明示が多い、結果の有無の明示も多い」というふうに、一般化は段階を経ながら進めていくものである。

また、先だっての学会で、「英文和訳は漢語ではなく大和言葉で」という発表をした人がいた。挙げた実例は、漢語だと堅苦しくて和語だと自然な感じのする例ばかりであった。しかし、日頃日本語を使用すればわかるように、くだけ過ぎない文を書くために漢語のほうが好ましい場合というのも多く存在する。したがって、この標語も、「早まった一般化」の例といえる。

(2-2-2)　ステレオタイプ化（stereotyping）

日常的なところでは、「男性だから」「女性だから」というのがよく聞かれるところであるが、出身地による決めつけ・偏見も時々耳にする。

また、「A 国には法律 B を守らない国民がかなりいる。だから A 国の国民は法律 B を守れない国民である」と言うのは、ステレオタイプ化である。(2-1-3) の合成の誤謬でもある。法律 B を守らない者がたくさんいることが目立っているからと言って、実際にはそれが全国民の何パーセントかと言えば、実際には非常に小さい割合であったりすることも多い。ステレオタイプ化は、主語に集団名が来る時によく見られる。

(2-2-3)　誤りのある標本（false sampling）

帰納的な結論を出す上で、統計データに偏りがあるなどして不適切な場合を指す。

「A というテーマには人気がない。自分が訊いた人が皆そう言っているから」と B 氏が言ったとする。B 氏その人に A というテーマについて関心や理解がなく、気質的にも B 氏とよく話す人と、A というテーマに興味を示す人がかなり違ったタイプである場合があ

る。

(2-2-4)　観測結果の選り好み

自分の主張にとっては都合の良い事例のみを挙げて、都合の悪い事例をとりあげない誤った論法のことを言う。社会科学系では、「検証バイアス」という専門用語にもつながる。

統計的な帰納法を用いる場合、特に人文・社会諸科学は複雑な要因が混在することが多く、また、前提に関しても注意深く考えてみる必要がある。言語学も、コーパスなどにより統計的な方法が広まりつつあるが、複雑系を扱う更なる精緻な統計方法の発展が望まれる。

(2-3)　タイプ３：因果関係理解の誤り

因果関係の判断も、言語純粋プロパーのテーマではないが、英語のように、因果関係を言語表現の中に明確に組み入れて表現されることも多いので、意味論系の言語学とはつながりがある。

(2-3-1)　因果関係の逆転

言語習得論では、生成文法と認知言語学では、統語構造の形成に関して逆の見方をとる。生成文法の画期的だったところは統語構造の生産性を示したところにあるが、それが果たして、実際の語彙や文と接する前から頭の中にあったシステムなのか、仮にあるとしてもその「先験統語システム」がどの程度に文の文法性の判断に関われるのか、に関して、生成文法の開祖チョムスキーは「先験システムが、文法的な文を作る基である」という考えに基づいて長年チョムスキー理論を展開してきたのに対し、認知言語学では、「言語に限らない（認知図式やカテゴリー化などの）認知能力と、それに基づいて、実際に接する言語表現からの一定の時間をかけた一般化処理能力が、統語理解を生み出す」と考える。認知言語学的な統語観からすると、チョムスキーの統語論は、因果関係を逆転していると判断される。

古典的な議論としては、組織 A が組織 B に何年か前にダメージを与える行為 C をした。何年もたって、組織 A に属する D 氏が、組織 B にとっては行為 C と間接的なつながりがあって C を思い起こさせるような行為 E をした。組織 B の人たちは、行為 E がきっかけで組織 A に対する抗議的行為 F をした。組織 A の人たちは、行為 F が A と B の軋轢の原因だと思い込んだ、ということも「因果関係の逆転」の一例と言えよう。

「卵が先か、ニワトリが先か」議論は、因果関係が不明なときの議論である[12]。

(2-3-2)　因果判断の誤謬（false cause）

Aが起きてからBが起きたという事実をとらえて、AがBの原因であると早急に結論づけることを言う。相関関係があるものを短絡的に因果関係があるものとして扱う場合もここに含まれる。医学関係でも時々話題になるが、社会事象に関する議論で時々見られる。

教育などにおいても、成果を出すのに、教えかたのうまさの他にも、難しいけどクリアさせなければならないこと、受講者側の姿勢の向上改善の仕方、聞く耳を持つまでの様々なバリアなど、様々な要因があり、単純な因果関係を述べられる問題ではないことが多い。

(2-3-3)　滑り坂論法（slippery slope）

ひとつの問題点を取り上げ、あたかもそれだけがどんどん事態を悪化させる絶対的な原因であるかのように強調する誤謬。

たとえば、不況下、組織Aにおいて、良質ながらその良さがなかなか理解できないBという製品の開発者に対して、売れない商品Bで評判が悪くなってAはどんどん危機的になる、とCという人が決め付けたとする。実際問題としてはさまざまな要因があり、また組織Aの建て直しのためにさまざまな方略があるにもかかわらず、ひとつのことや特定の人に危機の原因を帰してバッシングする議論などは、この誤謬の一例と言える。

(2-4)　タイプ4：用語選択の誤り

用語選択・表現選択の誤りも数種類のタイプがある。「充填された語」の場合は、話者の敵対的な意図が込められたもので、(2-5) タイプに分類することも可能である。

(2-4-1) が話者の攻撃的な性格に起因する問題であるのに対し、いっぽう、(2-4-2) 以下は、語彙などの意味論レベルで注意すべき問題である。

(2-4-1)　充填された語（loaded language）

受け手（聞き手・読み手）に論題に関して感情的な先入観を持たせようとして文の中に挿入した語句のことを loaded language（または emotionally charged words）と言う。

十分に話を聞いていないうちから「そのつまらない議論は」とか「そんなのはくだらない話ですが」とか、「変な考えを持っている人の話だけど」とか、あるいは逆に「これこそ正論ですが」とか「評判のいい人の話ですから」いうふうに、内容が客観的に十分に紹介・議論される前から、話者が自分の評価を盛り込むことで、最初から話に色をつけ、受け手に先入観を持たせようという議論で、質が悪いミスリーディングになることも少なくない。

この手の問題を解決する方略としては、(1) 決めつけてきたことの理由を問う、(2) 前提と決めつけた結論とのつながりを問う、あるいは、(3) 客観的・非感情的・非評価的表現で訂正した言い方を示す、という解決法が考えられる。

(2-4-2)　意味のあいまいさ

日本語の「あいまい」は、英語では 2 種類に分けられる。情報不十分で漠然としていることを、vague というのに対し、複数の解釈がある場合、ambiguous という。ambiguity には、語の持つ多義性に起因するものもあれば、文の構造が複数解釈可能な場合もあれば、同じ文でも状況の異なる複数の含意がある場合もある[13]。

(2-4-3)　多義語の誤謬（equivocation）

言語学の場合であれば、「文法」という言葉そのものが、学派によって指す内容の幅がかなり違う。伝統文法においては、個別言語の個別文法を普通指す。生成文法においては、この学派の立場から見ての「文を作り出す生得システム」、「抽象的な統語システム」を指す。認知言語学の場合は、さまざまな語句・構文の使用の中から、具体例から一般化されたものまでを幅広く指し、伝統文法では語法や慣用表現に入れていたものまで包括する。

付接詞（adjunct）もよく誤解される。生成文法においては、必須要素の補部(complement）に対して必須でない部分のことを adjunct と言う。いっぽう、イギリスの英文法の権威 Quirk の流れを組む英文法においては、文型論で SVA, SVOA として Adjunct を想定している。ここでは、明確化するために、7 文型論のほうは大文字で始まる Complement, Adjunct、生成文法のほうは小文字で始まる complement, adjunct で示す。（なお、ジーニアス英和辞典では、Adjunct の代わりに M（=modifier）で表示をしている。）この場合は、文の必須要素であり、主に前置詞句で表され、主語 S、目的語 O に次ぐ第 3 の必須要素の地位を占める。SVC の C が主語 S の属性、SVOC の C が目的語 O の属性を示すのに対し、A は別個の領域という概念を示す。したがって、Quirk 文型論の Ajunct は、生成文法の complement の一種である。Quirk 文型論の Complement は、Object, Adjunct とともに、生成文法の complement に含まれる。

(2-4-4)　媒名辞曖昧の誤謬（fallacy of the ambiguous middle）

「A ならば B。B ならば C。したがって、A ならば C」という三段論法において、B を同じ語でありながら意味の違うものを入れる誤った論法のことをいう。

たとえば、「A 語を身につけるためには、（A 語の）文法を身につけることが、必要である」「（生成文法で言う）文法は、学ばなくても身についている」ことから「文法を学ばなくても A 語を身につけることができる」は、この誤謬に入る。

この問題点は、「文法」という語の定義がずれているのに、一つの論理展開の中で混用したことに起因する。

(2-4-5)　類比の誤り（false analogy）

analogy は、認知言語学においては基本的な語義拡張活動、metaphor 形成の重要な一要素である。ただし、時には、類似性のたとえがあまりにも筋悪であることはある。新興の学問は、伝統的に確立された学問と対比されることがよくある。言語学を科学というにしても、たとえば、因果律を守るタイプの物理学や線形数学にたとえるのがいいのか、複雑系の生物学や社会科学にたとえるのがいいか、という議論があるが、意味論まで含ませるとなると、さまざまな言語使用が予測を超えた新しい言語知見を作り出すタイプであることを考えると、後者のほうがアナロジーとして近いことになる。

George Lakoff のメタファー論自体は、言語理解のうえでひとつの大きな役割を果たしてきた。特に、直接感覚的に理解しづらい領域を表すのに、直接感覚的に理解しやすい領域の語彙を意味拡張して転用するということは、言語にあまねく見られる多義性を理解する上で大きな見方である。身体メタファーなどは、その中でも最も基本的な部分であろう。しかし、部分的には行き過ぎもある。「議論は戦争」メタファーは、非常に論争的・闘争的な場合にのみ適用される。文化風土も大きく左右される。また、「戦争」が「議論」より基本的な経験であるという人は多くはいない。言語に遍在するメタファー論の例としては、いささか不適切に思われる[14]。

(2-5)　タイプ 5：論点ずらし（制限コード系）

議論における誤謬は、意図的ではない間違いから、意図的な詭弁、あるいは、議論上やむを得ず出てしまうものから、心理的に敵意を感じさせられるものまで、さまざまな段階がある。今まで述べてきたものでも、特に意図的に用いられた場合は「論点ずらし」に入れてもいいものもかなりある。(2-5) で扱うタイプは、「論点ずらし」と意図される場合も意識されない場合もあるが、相手方の議論に対し好意的ではないような場合に使われることが多い[15]。

(2-5-1)　権威論証（appeal to authority）

判断の根拠として、その集団にとっての権威の判断が判断基準となってしまうこと。もちろん見識が広く経験が豊富だからこそその道の権威なのではあろうが、常に無謬とは限らない。生成文法を論じるにも「チョムスキーがそう言っているから」では論証にならないし、メタファー論でも「ジョージ・レイコフがそう言っているから」では論拠にならない。

(2-5-2)　伝統に訴える論証（appeal to tradition）

よくある議論として、新しいことをしようと提案するときに、「前例が無い」といって却下することがある。それが常に適用されるようだと何らの進歩も無い。

英語教育で、従来の 5 文型論ではフォローできない基本的な構文として、文の必須要

素としての「動詞＋前置詞句」「動詞＋目的語＋前置詞句」を理解することで、前置詞句が必須要素として動詞に従う文型 SVA、SVOA を追加する 7 文型論で英語の基本構造のよりよい理解に資すので基本文型を 5 から 7 に拡張することを英語教育に取り入れようという主張に対して、「今まで 5 文型論でやってきたのだから、改める必要は無い」というような返答も、改善案を検討することなく門前払いするということで、この論法に該当する。

(2-5-3)　多数派論証（appeal to bandwagon, appeal to popularity）

「こちらが多数派だから、こちらが正しい」という議論の仕方であるが、多数意見だから真実とは限らない場合もよくあるし、新しい知見というものは、往々にして最初は少数意見から始まるものである。教育においても、「この科目のほうが人気があるのだからそれを増やす」という議論があるが、基礎固めのような科目は、面白みは無くても先々を考えれば重要であり、それを軽視しては肝心な内容が損なわれたままである。基礎固めは面白さという点では地味な存在になりやすいが、「良薬は口に苦し」ということがある。

(2-5-4)　人格攻撃論法（人身攻撃：ad hominem、argumentum ad hominem）

「人格攻撃」とは、ある主張に対する応答として、その主張そのものに具体的に反論するのではなく、それを主張した人の個性や信念を攻撃することで論点をすりかえることを言う。

A が B に、「C さんが P を提起している」といったのに対し、B が「C は能無しだから（P は検討するに値しない）」というような論法である。他に、「C は何様なんだ」というような議論も、(2-5-4) や (2-4-1) に該当する。この詭弁は、二重の意味で悪質である。ひとつはきちんと議論することを回避していることであり、もうひとつは、個人をあまりにも簡単に切り捨てているところにある。B のようなことを言う人は、自分が C のように言われて痛い目にあうまでは分からないものなのであろう。

(2-5-5)　状況に基づく対人攻撃論法（ad hominem circumstantial）

「人格攻撃」の一種で、提案者の置かれている状況について攻撃するような議論を「状況に基づく対人攻撃論法」と呼ぶ。

たとえば、A 氏が斬新な提案をしたことに対し、B 氏が他の人に「A 氏は評判が悪いから、彼の提案は間違いだ」というような場合はこれに相当する[16]。

(2-5-6)　お前だって論法（Tu quoque）

A 氏が、「B することは時代にそぐわないから改めるべきだ」と言うのに対して、C 氏が「A さん、あなたも B しているだろ」で議論を打ち切ろうとする論法。

(2-5-7)　多重尋問、多重質問の誤謬（loaded question）

質問文の中に、質問者が決めつけている答えを引き出すように仕組まれたものを、多重質問（loaded question）という。

ネット時代、メールによるトラブルはつきものであるが、その中に時々出てくる例として、「君は私に悪意のあるメッセージを送ったことを、認めるのか、認めないのか」といったメールを受け取った経験をした人もけっこういるようである。本人に悪意があるわけでは無く、相手方の誤解なのだが、このように、イエスで答えてもノーで答えても事実と反するような（話者が意図的に引き出そうとする）文言を答えさせようとするような仕組みになっていて、loaded question の例に該当する。

(2-5-8)　わら人形（論法）（straw man）

かかし論法、架空の論法ともいう。主張 A を、自分の都合の好いように表現し直し、A が主張していないことをさも主張しているかのように論じて A を論破したかのように見せかける論法のことをいう。

バッシングのときには、実際にはそうであると証明されていないイメージをつけて批判することが、残念がら、時々見られる。

(2-5-4) 以下のような議論が生じるのは、これらの誤謬を発する人が、特定の人や立場に偏見を持って、話を聞こうとしない姿勢から生じることが多い。

(2-5) のタイプの誤謬を解消するには、「初めに敵ありき」的な議論をする人が、議論をする姿勢を改めるか、あるいは、敵対的な議論で議論を打ち切ろうとする人が公平な議論を阻害しているということを多くの人が納得するまで事態の推移を辛抱強く待つか、のどちらかが一般的な解決法である。(2-5) のようなタイプの議論をしないように教育的にも努めて行く必要はあろうし、これらがするべきではない議論の方法であると多くの人が会得すれば、(2-5) のようなたちの悪い議論も少なくなっていくと思われる。ただ、世の中、競争、ストレス、匿名性の信用できないメディア情報などがある以上は、そうすぐには無くなるものではないので、絶えず警戒をする必要はある。(2-5) のような誤謬をしないことこそ、真面目なコミュニケーション活動の第 1 歩であろう。

(2-4) のタイプのうち、(2-4-1) 対策は、(2-5) 対策に準じる。「感情語・マイナスイメージの語」を使うかどうかの問題は、言語学の問題なのか、倫理学や教育学や心理学の問題なのか、といえば、一つの領域が受け持つというよりは、学際的にまたがってでも検討していくべき問題である。少なくとも、言語学は、スピーチ・レベルというカテゴリーでこの問題に取り組んできたし、critical discourse analysis や pragmatics をはじめとして、今後とも取り組んでいく。(2-4) タイプでそれ以外となれば、「意味論」の問題も関

係してくる。基本的な問題解決は、「語句の意味・定義」を明示することにあるが、言語の生産的な意味拡張活動を踏まえながら、定義に関して絶えず検討を重ねる必要性があるものもあり、言語、とくに意味論には敏感になり続ける必要性がある。

(2-1) は論理学との関係があるし、(2-2) は統計学が絡むが、言語活動上注意すべき基本法則であることには違いない。(2-3) 因果関係の判断も、言語純粋プロパーのテーマではないが、英語のように、因果関係を言語表現の中に明確に組み入れて表現されることも多いので、意味論系の言語学とはつながりがある。

クリティカル・シンキング、とりわけ誤謬論は、議論の基礎として位置づけられ、言語をめぐる議論にもいろいろ適用できた。最後に、言語学の方からこの問題にどのような貢献ができるのか、検討する。

4．クリティカル・シンキングにおける言語学の役割

言語学は、19 世紀の歴史言語学、あるいはソシュール以来の構造分析、あるいは個別言語の詳細な記述、あるいはチョムスキーの生成文法などで、長年、分析思考が主流であった。しかし、扱う内容が、ディスコースやテキストと範囲が広くなっていくと、単なる積み上げでは十分ではなくなってくる。

意図・意味づけ・文化風習・言語化におけるとらえ方・言語表現と社会との関係、といった、意味論、社会諸科学、心理学の視点が、言語分析をより意義深いものにしてきている。

たとえば、(2-5) で扱ったような、「大人げない」議論の仕方に対しては、critical thinking と pragmatics や discourse analysis が相互関連する critical discourse analysis などで、「より公正な言い方とは何か」といった問題提起から、(2-5) のような陰湿な問題に対処していく方法が考えられる。言語は、使い方がひどければ人を傷つけるものであるが、それを解消するにも言語をもってする、人間は、かなりの程度、言語にとらわれた生き物である。

(2-1), (2-2), (2-3), (2-4) に関しても、それぞれ、規範的な文のつなげ方、規範的な数量表現の文法、因果関係を述べる適切な表現文法、意味の多義の適切な分析・理解・適用、というふうに、言語学の知識が活用されるものばかりである。そして、(2-5) についても、politeness（ていねいさ）をはじめとして言語学のテーマでもある。

言語学の成果と、心理学・社会学・教育学などの知見とが協力して、言語学の成果がさらに有益なものになっていく。

5．結

小論では、クリティカル・シンキングの重要性を確認するとともに、言語学の議論との兼ね合いに関して、限られた時間・スペースではあったが、様々な関係を指摘した。

言語学がクリティカル・シンキングに急速に貢献するようになっている。また、クリティカル・シンキングの適用によって、言語学への誤解が少しでも減り、その価値・役割の理解を得るよう努めた。

言語学とクリティカル・シンキング、関連する諸分野のさらなる相互理解・連携・発展を願って筆を置く。

註

---

1 Chomsky は、ここ数年は、政治評論活動の方がかなりの割合を占めるが、統語論からの意味論の排除、言語習得における生得システムを問題の中心に据える姿勢は、終生変わらないようである（Chomsky [2002] などを参照）。

2 Lee (2002), Langacker (2009) などを参照。

3 言語学の概説書でも、(2-2)の立場を反映させているものとそうでないものとで今でも分かれている。Russell (2008), McGregor (2009), Yule (2010), Finegan (2011) などは、(2-2) の立場に関してある程度の配慮のある方であるが、それでも(1-3-2)の解説に(2-2)の考え方が十分反映されているとは言い難いところがある。(1-3-2)に関する(2-2)の立場は、Langacker がすでに 20 年以上にわたって主張しているところで（たとえば Langacker [2009]）、近年、ようやく、Miller (2011) のような一般向けの解説も出始めた段階である。

4 Tomasello (2005) は、長年のチョムスキー派による生得主義的な言語習得論に対する本格的な反論として、言語を獲得する上での認知的な側面や、養育者とのコミュニケーションの持つ重要な役割を細かく述べ、また、統語構造の獲得にも、認知図式と一般化という経験学習の重要性を詳しく説明している。

5 言語学の方面からは、pragmatics や discourse analysis の分野に関して、特にこの 10 年の間に、社会科学的知見を取り入れるものが増えてきた。Mey (2001), Goatly (2002), Bloor et al. (2007), Montgomery (2008), 野呂 (2009), Mooney et al. (2010), Saltzman et al. (2011), van Dijk (2011) など。

いっぽう、社会学の方からは、以前から盛んであったコミュニケーション学が、日本でも近年、注目されるようになってきている。すでに Adler et al.(2008) や、DeVito (2010) などは、すでに相当な版を重ねている。これらの分厚い総論書の中にも、第 2 節で述べるような、コミュニケーション上注意すべき事項についても至る所に記述がみられる。

日本でも、末田（2011）のように、言語使用まで盛り込んだコミュニケーション論が社会学の方からも出てくるようになった。

6 コミュニケーション論は、今では、「個人間コミュニケーション」に重点を置くものと、「異文化間コミュニケーション」に重点を置くものと、両方出てきている。文化間のコミュニケーションの違いはそれなりに大きな問題である（たとえば Bowe et al. [2007]）が、小論では、相互理解のために論理的に考える言語的根拠を中心に探る。

7 「使用から規則へ」、すなわち Usage-based model は、認知言語学の中心人物 Langacker によって、すでに 20 年以上前から主張されてきている。文法と語用論との関係も、Ariel (2008) を初め、近年研究が増えている。

8 上野他（2006）、上野（2007）など。

9 他にも、Washburn (2009), Watson et al. (2011) がある。特に前者は、単なる用語集ではなく、

体系的かつ網羅的で、大学教材の一つの範を示している。

[10] たとえば、Browne et al. (2011) はよくまとまっている。Gula (2002) は和訳書もあって読みやすいが、列記に熱を入れすぎていて、誤謬の深刻さの比較が十分ではない。また、Walton (2005) は、長年この問題に取り組んできた人の一つの到達点と言える。いっぽう、Baggini et al.(2011) は、この問題が哲学的議論の問題であることもよく示している。

[11] それぞれの誤謬の定義には、logicalfallacies. info、fallacyfiles.org、Literacy Online Education、「新・詭弁のガイドライン」、ウィキペディアなどを参考にさせていただいた。

[12] 進化論的には、「卵」は、より広く、魚卵など殻なしのものまで入れて考えれば「卵が先」であろうが、「ニワトリ」を「親の身体」と考えれば、産卵生殖以前の段階で、「親の身体」が先にあったと考えられる。

[13] (2-4-2) から (2-4-6) はにかけて、言語学の意味論が多いに活躍する。なお、意味論は、論理学の方では(2-1)のような問題を扱うものが多かった。意味論に関する本も、形式意味論を主に取り上げるタイプから、非形式的な意味論を重視する本まで、結構なばらつきがある。Lyons の古典的な大著とともに、近年、Saeed (2008), Riemer (2010), Goddard (2011) といった意味論の本はその点でバランスが取れてきている。

[14] Lakoff の「議論は戦争」とは、議論を語る時に動詞や形容詞のコロケーションとして戦争の用語から採ってきたことを指摘したものである（Lakoff and Johnson [1980]）。認知言語学のメタファー理論では、一般に、分かりづらい領域 A を言語表現するのに、より分かりやすい領域 B から用語を借りてくる、という言語の意味拡張を説明する一つの根本法則であった。たとえば、身体や空間は他の領域への意味拡張が盛んで、「基本的な根源領域」と言える。それと比べると、「戦争」が「議論」の根源とする考え方は、よほど闘争好きな文化風土でもない限り違和感を感じるものであり、実際、論争相手を「撃ち倒す」といったようなきな臭い表現はそうそう使うものでもない。誤った強調によってメタファー理論の深化が損なわれないことを願うものである。

[15] 重要な事柄から受け手（聴き手、読み手）の注意を逸らそうとする修辞上、文学上の技法を指す慣用表現を、英語では red herring（燻製ニシンの虚偽）と呼ぶこともある。

[16] なお、Chomsky が急進的リベラリストだからといって、全ての生成文法かがリベラル志向でもないし、また、Lakoff が保守的だからと言って、全ての認知言語学者が保守的というわけでもない。たとえば、David Lee は、認知言語学を、リベラル的なクリティカル・シンキングの道具としての活用を考えている。

参考文献

Adler, Ronald B. and George Rodman (2008) *Understanding Human Communication*. 10th ed. Oxford University Press.

Ariel, Mira (2008) *Pragmatics and Grammar*. Cambridge University Press.

Baggini, Julian, and Peter S. Fosl (2011) *The Philosopher's Toolkit: A Compendium of Philosophical Concepts and Methods*. Wiley-Blackwell.

Bloor, Meriel, and Thomas Bloor (2007) *Practice of Critical Discourse Analysis: An Introduction*. Oxford University Press.

Bowe, Heather, and Kylie Martin (2007) *Communication Across Cultures: Mutual Understanding in a Global World*. Cambridge University Press

Browne, M.Neil and Keeley, Stuart M. (2011) *Asking the Right Questions: A Guide to Critical*

Thinking. International Ed. US: Pearson Education.

Chomsky, Noam (2002) *On Nature and Language*. Cambridge University Press.

Curzan Anne, and Michael Adams (2011) *How English Works: A Linguistic Introduction*. 3rd ed. Prentice Hall

DeVito, Joseph A. (2010) *Human Communication: The Basic Course*. 12th ed. Allyn & Bacon.

Ennis, R.H., "Critical Thinking Assessment" in Fasko, *Critical Thinking and Reasoning: Current Research, Theory, and Practice* (2003).

Fisher, Alec (2001) *Critical Thinking: An Introduction*. Cambridge University Press.

Fisher, Alec and Scriven, Michael. (1997) *Critical Thinking: Its Definition and Assessment, Center for Research in Critical Thinking* (UK) / Edgepress (US).

Finegan, Edward (2011) *Language: Its Structure and Use*. 6th ed. Heinle.

Goatly, Andrew (2000) *Critical Reading and Writing*. Routledge

Goddard, Cliff (2011) *Semantic Analysis: A Practical Introduction*. Oxford University Press.

Gula, Robert J. (2002) *Nonsense: A Handbook Of Logical Fallacies*. Axios Press.

Lakoff, George (1999) *Philosophy In The Flesh*. Basic Books.

Lakoff、George, and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.

Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*. Mouton De Gruyter;

Lee, David (2002) *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Oxford University Press.（宮浦国枝訳『実例で学ぶ認知言語学』(2006) 大修館書店）

LEO: Literacy Education Online Logical Fallacies. http://leo.stcloudstate.edu/acadwrite/logic.html

List of Fallacies http://en.wikipedia.org/wiki/List_of_fallacies

Logical Fallacies http://www.logicalfallacies.info/

Logical Fallacy http://www.fallacyfiles.org/logifall.html

Martin, J.R., and David Rose (2007) *Working With Discourse: Meaning Beyond the Clause*. 2nd ed. Continuum Intl Pub Group

McGregor, William B. (2009) *Linguistics: An Introduction*. Continuum Intl Pub Group

Mey, Jacob L. (2001) *Pragmatics: An Introduction*. 2nd ed. John Wiley & Sons.（小山亘訳『批判的社会語用論入門―社会と文化の言語』(2005) 三元社）

Miller, Jim (2011) *A Critical Introduction to Syntax*. Continuum Intl Pub Group

Mooney, Annabelle, Jean Stilwell Peccei, Suzanne LaBelle, Berit Engy Henriksen, Eva Eppler, Anthea Irwin, Pia Pichler, Sin Preece, Satori Soden (2010) *Language, Society and Power: An Introduction*. 3rd ed. Routledge.

Montgomery, Martin (2008) *An Introduction to Language and Society*. 3rd ed. Routledge.

野呂 香代子, 山下 仁 (2009) 『「正しさ」への問い―批判的社会言語学の試み』 三元社

Paul, R.W., and Elder, L. (2011) About Critical Thinking www.criticalthinking.org/about-critical-thinking/1019

Riemer, Nick (2010) *Introducing Semantics*. Cambridge University Press.

Russell, Shirley (2008) *Exploring Language*. Oxford University Press.

Saeed, John I. (2008) *Semantics*. 3rd ed. Wiley-Blackwell.

Salzmann, Zdenek, James Stanlaw & Nobuko Adachi (2011) *Language, Culture, and Society: An Introduction to Linguistic Anthropology*. 5th ed. Westview Press.

Scriven, Micheal & Richard Paul (1987) "Critical Thinking as Defined by the National Council for Excellence in Critical Thinking" A statement at the 8th Annual International Conference on Critical Thinking and Education Reform, Summer 1987.

「新・詭弁のガイドライン」http://ronri2.web.fc2.com/kiben.html

Stephen Downes Guide to the Logical Fallacies http://onegoodmove.org/fallacy/toc.htm

末田 清子, 福田 浩子 (2011) 『コミュニケーション学―その展望と視点』 松柏社

高田 明典 (2011) 『現代思想のコミュニケーション的転回』 筑摩書房

寺島 信義 (2009) 『情報新時代のコミュニケーション学』 北大路書房

Tomasello, Michael (2005) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Harvard University Press. (辻幸夫他訳『ことばをつくる―言語習得の認知言語学的アプローチ』(2008) 慶應義塾大学出版会)

上野 義和 (2007) 『英語教育における論理と実践―認知言語学の導入とその有用性』 西条印刷所

上野 義和、福森 雅史、森山 智浩、 李 潤玉 (2006) 『英語教師のための効果的語彙指導法―認知言語学的アプローチ』 英宝社

Walton, Douglas (2005) *Fundamentals of Critical Argumentation*. Cambridge University Press.

Washburn, Phil (2009) *The Vocabulary of Critical Thinking*. Oxford University Press.

Watson, Jamie Carlin & Arp, Robert (2011) *Critical Thinking : An Introduction to Reasoning Well*. Continuum Intl Pub Group

Yule, George (2010) *The Study of Language*. 4th ed. Cambridge University Press